

纏向遺跡第 176 次調査現地説明会資料

平成 25 年 2 月 3 日 (日)
桜井市教育委員会
纏向学研究センター

1. はじめに

桜井市では昨年度に引き続き、纏向遺跡の範囲確認調査をおこないました。この調査は平成 20 年度から着手しました、一連の範囲確認調査の第 6 回目の調査となります。この調査は桜井市大字辻 45 番地 1、47 番地、64 番地 1 において実施したもので、調査期間は平成 24 年 11 月 14 日からおこない、現在も継続中です。調査に際しましては、今回も土地所有者並びに地元関係者の方々から多大なるご協力を賜りました。この場を借りましてあつく御礼申し上げます。

なお、現在調査面積は約 500 m²となっています。

2. 調査の目的

平成 20 年よりはじまった一連の範囲確認調査（纏向遺跡第 162 次、第 166 次、第 168 次、第 170 次、第 173 次調査）では、3 世紀前半の方位や中軸線を揃えた計画性の強い建物群と、建物群に付属すると考えられる遺構が確認されています。今回の調査の主な目的は、①これまで検出している建物群の西側にどのような遺構が広がるのか確認することと、②建物群を含む居館域全体を区画する施設を確認することでした。

3. 調査地の位置と環境

調査地は桜井市の北部に位置し、現在は標高 75m 前後の東側から派生する微高地上に位置しています（図 1）。この微高地は、太田北微高地と呼ばれ、その南と北は古い河川の跡である谷地形となっています。太田北微高地は東西に細長く、南北の谷部分からは約 2 m 高くなっています。周辺は纏向遺跡のなかでも比較的古い時期（3 世紀前半、庄内式期）の遺構が集中して存在する地域であり、過去の調査でも多くの庄内式期の遺構が検出されています。

4. 検出された遺構

今回の調査では、広い面積を効率的に調査するため、5ヶ所に分散して調査区を設定しています（図 2）。調査区は 1～5 区と命名しています。以下に、1 区と、2 区～5 区に分けて調査の成果を説明することとします。

1区

1区は、第20次調査地（昭和53年）と重複して設定しており、これまで建物群が検出されている第162次調査地・第166次調査地の西側にあたります。1区は、微高地の中でも東側や南側より本来の地形が低く、厚い包含層が堆積していました。1区では上層の遺構面と、下層の遺構面、地山面の3つの遺構面が存在しており、これまで3世紀前半の建物群が検出されているのは下層遺構面です。下層遺構面は人工的に造成されたとみられる黄褐色の粘質土ブロックを多く含む灰褐色土（以下、整地土）で構成されており、東から西へと徐々に下っていきます。

桜井市教育委員会では、第20次調査で検出されていた柱穴の一部が一連の範囲確認調査で検出した建物B、C、Dと方位を合わせることから、東西が3間（約5m）、南北約8.3mの建物（建物A）の存在を推定していたため、建物群の確認および居館域西側遺構の状況を確認することを目的として調査を行いました。

柱穴群 1区では、整地層ないしその下の地山層上面から掘り込まれた多数の柱穴を検出しましたが、建物Aの柱穴推定位置からは柱穴が検出されず、建物Aの存在は確認できませんでした。しかしながら、整地層上面から掘り込まれた多数の柱穴が確認できることから、1区には何らかの建物遺構が存在する可能性が考えられます。建物遺構の構造については、調査面積の制約などから今回の調査では明らかにできていません。

また、柱穴群の時期は遺物の整理が完了していないため、現時点で個々の柱穴の厳密な時期を導き出すことは困難です。しかしながら、これまでの調査で得られた知見から、柱穴群は3世紀中頃を含めてそれ以前のものが多くあるものと考えています。

2～5区

2～5区では、3世紀前半の建物群を含む居館域の区画施設の検出をめざしました。特に、2区の北側に位置する第21次調査では、南北に流れる流路の東岸が確認されており、これが建物群の西限となる人工的な溝である可能性が指摘されていました。また、第173次調査で検出した3世紀中頃～後半に埋没した東西溝（SD-1001）の想定延長線が3区・4区を通るため、この東西溝の続きが検出できる可能性も考えられました。

また、1区で認められた黄褐色の粘質土ブロックを多く含む整地上は2区～5区では全く認められず、基本的に地山層上面で遺構を検出することとなりました。現在の地形に対応するように、地山上面も5区が最も高く、西側に行くにつれて低くなっていきます。

東西溝(SX-1001) 3～5区では、東西に伸びる溝(SX-1001)を検出しました。この東西溝は幅が5.8m以上で、長さは57mあります。この溝は3区で北側に折れ曲がり、さらに調査区外へと続くことがわかりました。この東西溝は、第166次調査、第168次調査で検出した幅8m、長さ54m以上の南北溝と組み合

わさり、微高地を区画するものと考えられます。5区では深さ約0.6mが残存していましたが、3区では約0.2mしか残存しておらず、西側では上部が後世に削平を受けているものと考えられます。この溝の埋没時期は布留2～3式期（4世紀中頃～後半）であり、溝が機能していた時期もそれに近いものと考えられます。

旧流路 2区の西端で流路の北岸を検出しています。古墳時代後期（6世紀）に埋没したもので、東南東から西北西へと流れていたと考えられます。この方向は建物群が立つ微高地の南側を流れていた旧河川と一致することから、その一部と考えられます。

その他の遺構 3区・4区では、直径が2m～3m程度の土坑（SK-1001、SK-1004など）を複数確認しています。これらの土坑は有留0式期（3世紀後半）に埋没したものが多いと考えられますが、現時点では、厳密に時期を特定できていません。また、2～5区では1区のような柱穴はほとんど認められませんでした。

5. まとめ

今回の調査では、建物群の南西側と西側の様子を知る事ができました。知見を順に挙げると、

- ① 1区では多数の柱穴を検出しています。しかしこれまで想定していた建物Aの柱六推定位置からは柱穴が検出されず、建物Aの存在は確認できませんでした。ただし多数の柱穴が認められることから、何らかの建物遺構が存在したことが想定できます。
- ② 2区～5区では、居館域の全体の区画施設の検出を目的としていましたが、区画施設は認められませんでした。また、1区で検出されている多数の柱穴は2区～5区では認められず、一定の空閑地が広がっていた可能性があります。
- ③ 4世紀中頃から後半に埋没した東西溝（SX-1001）は、微高地の東側と南側、西側の一部を取り巻く大規模な区画溝の一部であることが判明しました。これまでの調査では、微高地上に4世紀中頃から後半の遺構は検出されておらず、区画の内側に何があったのかは不明ですが、首長居館を囲う溝の可能性が考えられます。同じ地点に複数の時期にまたがって居館が造営されていることは、この土地が居館の造営に適した立地であったことをうかがわせるものです。
- ④ 1区の西に隣接する第21次調査の成果から、建物群が立つ微高地の西側は人工的な南北の溝が走っている可能性が指摘されていましたが、今回の調査では想定されたライン上に南北溝は認められませんでした。そのため第21次調査で検出した溝は、微高地の北側を流れる旧河道が分岐した自然流路で、南西方向に流れる可能性が指摘できます。

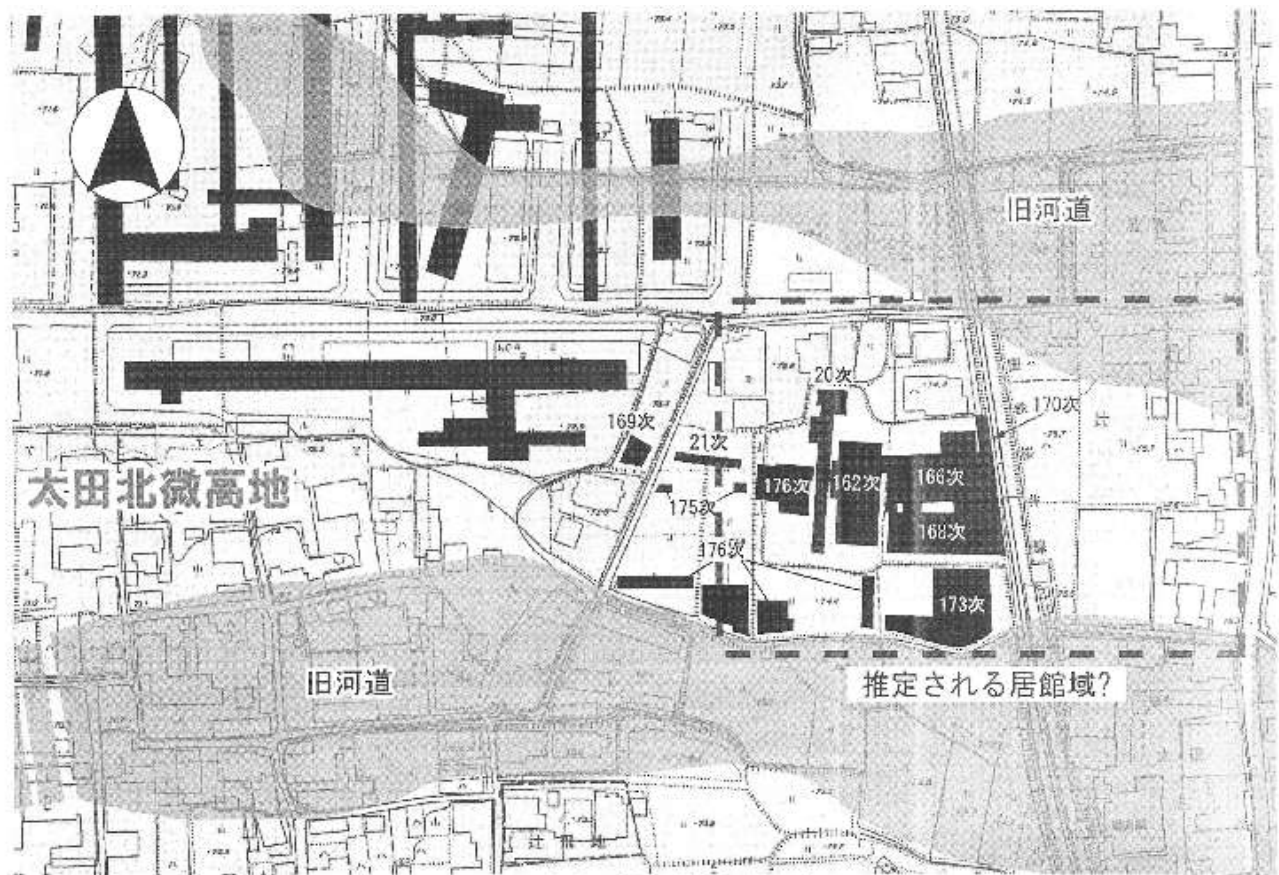


図1 これまで調査地の位置と地形

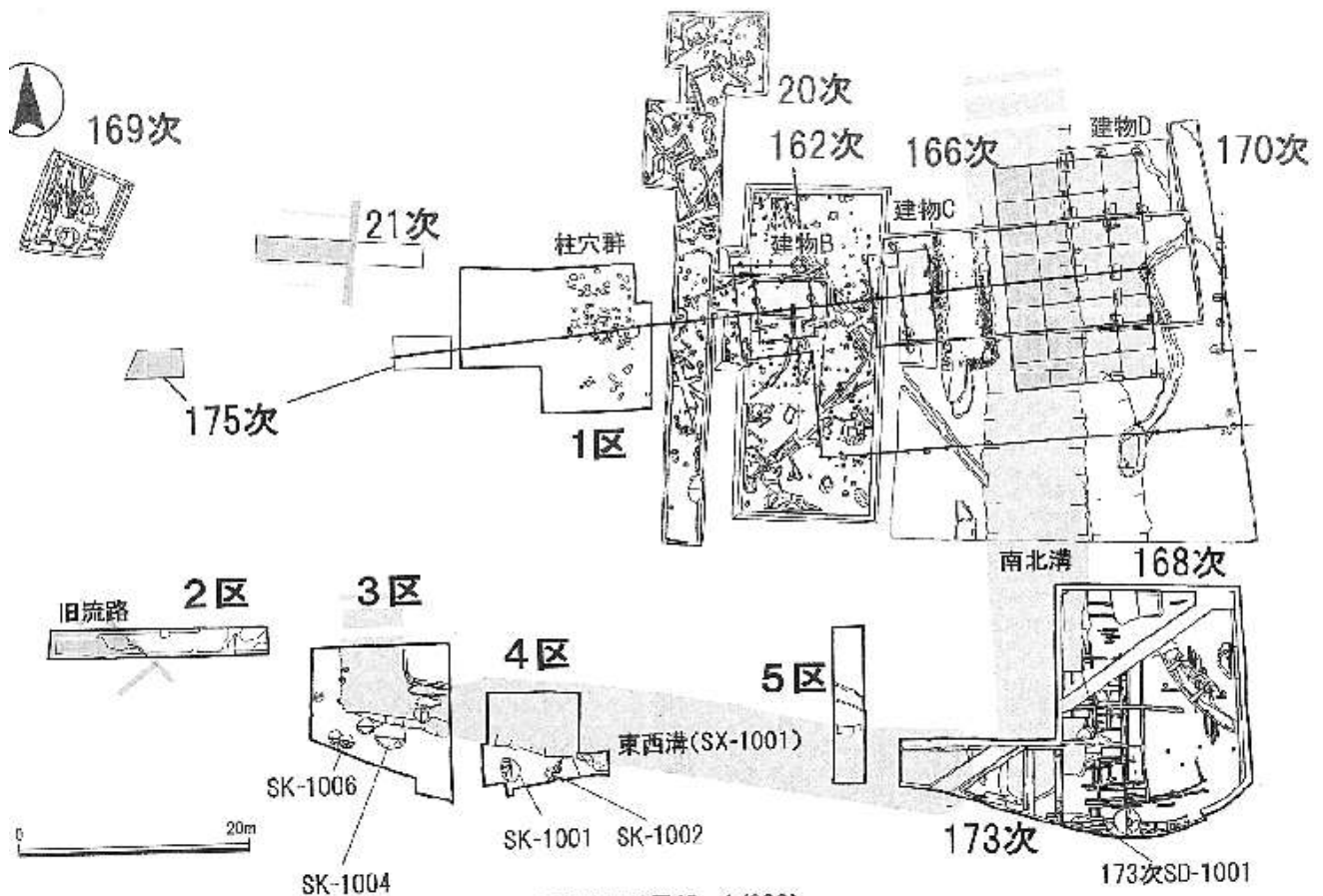


図2 調査地の位置(S=1/300)